82　誌上発表　チェーホフの作品における医師像

藤倉　一郎
藤倉医院

医師としてのチェーホフは優れていたかどうかは決め難い．愛人である文学が，正妻である医学にまさっていたからである．しかし，チェーホフは医師の資格を誇りにしていた．

彼の作品の中で医師はどのように表現されているか医師の登場する次の6作品で検討する．

1）咲きおくれた花；チェーホフ22歳の学生の時の作である．崩れゆく貴族の悲哀と這い上がって行く農奴出身の医師のたくましさが感じられる．公爵の娘が発熱して，この医師が往診した．彼は聡明で知的で学識があり，娘のマーシャは彼に強くひかれた．公爵家は貧しく負債が重なり，屋敷を手放して小さな家に移らざるをえなかった．マーシャは咳がつづいて何度か医師の診察を受けたが，ラッセルが聞こえ，転地療法が必要であると告げられた．マーシャは囁くように愛を告白した．医師は「私はお金や上流婦人のためだけに，あの困難な道を歩いてきたのだろうか？」と考え，翌日南フランスへ療養のためマーシャと一緒に旅立った．しかし，マーシャは3日後亡くなってしまうのである．医師のやるせない愛情の感じられる佳作である．

2）敵；郡医が6歳の一人息子をジフテリヤで失い，悲嘆にくれているとき，玄関に一人の男が現れて往診を頼みこんできた．妻が急病で，すぐ往診してほしいと，しつこく頼むので再三断ったが断りきれずに，しぶしぶ男の馬車に乗って患家にたどりつくと，妻は不在だった．男は妻が若い男と駆け落ちしたことを知って，落胆し医師に泣きながら妻の悪口を言って畜生だ，卑劣だ，陰険だと訴えた．医師は醜い眼差しで男を見て，帰宅したが，道々男やその妻を批判し憎しみ蔑みつづけた．医師の偏狭な心が悲しい．

3）わびしい話；主人公は62歳になる有名大学の名誉教授でロシヤ国内はもとより海外でも名のうれた人物である．見た目もだいぶくたびれていて不眠症で悩んでいる．太った妻は醜くなり金のことと愚痴をこぼすだけである．18年前友人の眼科医が一人娘を残して死んだとき，彼に後見人を頼まれたので，世話していたが，俳優の道を断念して帰ってきた．父と娘のように話し合うのを妻は邪推して，会わないようにいわれ悩んでいる．立身出生した医師の末路をわびしく描いている．

4）6号室；主人公は田舎の慈善病院の院長で話し相手もなく退屈な日々を送っていたが，患者の一人と回診のたびに話し合い，話し込むことが多くなると，病院内で噂になり，副院長によって6号室へ精神病として隔離されてしまうのである．必死になってそこを脱出しようとすると，看守に頭をなぐられ翌日脳卒中をおこして死んでしまうのである．不気味で不条理な世界を描いている．

5）イオヌーィッチ；郡医病院で働く医師イオヌーィッチは開業して患者が増え，いそがしくなると食べ物とお金にだけしか興味がなくなり，若いころあこがれていた良家の娘にあっても魅力を感じなくなり，クラブでカルタをやり，一人で上等なワインを飲みながら食事をしている．理想にもえていた青年医師が肥って食事とお金にまみれているのが悲しい．

6）ワーニャ叔父さん；晩年の戯曲で年老いた大学教授が田舎の領地を売り出すことを提案し，主人公のワーニャが騒動をひきおこす話であるが，ワーニャの友人が医師である．医師は老教授の若い妻に恋心を持っているが，ワーニャの妹ソーニャは医師を恋慕している．医師とワーニャは若い美貌の妻に恋心を抱きながら互いに牽制し合っている．恋愛物語で医療は全く関与ない．